

「ビックリされるくらいに」

昨日は、福井県内の私立学校が一堂に会して、私学振興大会というイベントを開催しました。もっとも「イベント」というには、少々お堅い催しではあります。私立幼稚園協会だけでなく、私立の中学高等学校や専門学校が共同宣言を採択して、福井市や福井県に対し、私立学校のより一層の発展に協力して欲しいと要望する、そんな大会です。ご出席くださった国会、県議会、市議会の議員の方々に私立学校の声は届いたのではなかろうか、と思いたいところです。ちなみに、私は、この大会の駐車場係を仰せつかりまして、どれが来賓の方々の車かも分からない中で、来賓専用駐車場への誘導をしていました。

さて、この私学振興大会の中で、しきりに訴えられていたのは、少子高齢化をはじめとした社会変動への適切な対応の必要でした。公立学校に比べて、どうしても資金繰りに困難をきたす私立学校ですから、子どもの人口が減っている現状において、相応しい補助金制度の策定や公立学校の定員数の調整などを求めています。それは、大雑把な言い方をすれば、どう頑張っても、かつてのように子どもがたくさん増えて私立学校の経営が回復することはありませんから、その現実を踏まえて、対応策を講じて欲しいということです。

この点については、ここ敦賀教会幼稚園も同じですね。どう頑張っても、園児数 100 人を超えた昔のようにはいかないでしょう。敦賀市内の出生数は 400 人を切っているのが現状です。共働きのご家庭が当たり前になっていて、このご時世、保育時間の長い保育園や認定こども園ではなく、教育機関である幼稚園として運営を続けていくことは、実はとても大変なことです。

実は、今日の聖書のお話も、そういうお話なのです。そういう話とは、どういう話かと言うと、

神様のもたらす願い通り未来を心に留めながら、そうじゃない現実を直向きに生きていく、ということ。信仰者にとって、かなり残念な事実ですが、今日の読むに心地よく、聴くに嬉しい御言葉は、歴史的に見ると“完全には”実現しなかった預言でありました。「しかし、見よ、わたしはこの都に、いやしと治癒と回復とをもたらし、彼らをいやしてまことの平和を豊かに示す。そして、ユダヤとイスラエルの繁栄を回復し、彼らを初めのときのように立て直す」。これは、バビロン捕囚というユダヤ史上最も悲惨な出来事の後、神様の慈しみによって、その悲劇が癒やされ、回復されるという神様の御言葉であります。この御言葉は、ユダヤ・イスラエルの歴史において、完全ではなく、一部のみ実現しました。具体的に言う。「初めのときのように立て直す」とはいかなかったのです。「初めのとき」とは、英雄であったダビデ王の時代や、聡明だったソロモン王の時代のことを指しています。しかし、バビロン捕囚という悲劇の後、確かに、ユダヤ・イスラエルは聖なる都を取り戻し、その信仰の一部を回復させはしましたが、到底、「初めのときのように」とは言える姿ではありませんでした。この歴史的事実は、いくら今日の御言葉が心地よく聴こえても、無視してはいけないうでしょう。神様の御言葉と、神様が実際に導かれた歴史との間にある、簡単には埋められない落差を、では、どうやって受け止め、理解したら良いのか、その少々面倒と思えるような信仰的考察も、私たちには大切なことです。私たちは、思考停止の盲信者ではなく、神様に与えられた知性をもって、この世界を正しく生きようとする、神様の似姿なのですから。福音と現実の違いを乗り越えて、神様の御心を尋ね求めて参りましょう。

神様は、「ユダとイスラエルの繁栄を回復し、彼らを初めてのときのように立て直す」と言われました。この御言葉の方向性としては、間違いなく喜びと幸せと祝福の方を向いています。そこに異論はないかと思えます。ただ、その程度と細部が、実際の歴史とは異なっているということです。神様は、確かにバビロン捕囚から救い出し、聖なる都を回復された。しかし、それは初めのときの

ようではなかった。完全に元通りということではなかった。神様は確かに「わたしに対して犯したすべての罪から彼らを清め、犯した罪と反逆のすべてを赦す」ことを実現された。しかし、それは、初めのときに全てを戻すことではなかった。完全に元通りということではなかった、ということです。

この不完全な回復の事実は、過去の栄光、古き良き思い出の再来、再現を願っている間は、とても不満かも知れません。「あの時のように」「昔と同じように」と願っている間は、あの時とは違う未来、昔とは異なる祝福は、心を満たさないかも知れません。でも、神様の導かれる歴史とは、あるいは人生とは、そういうものだと、アーメンと言って受け止めてみると、少し違った世界が見えるかも知れません。

神様の仰る「回復」が、その実、「元通り」ではないということは、ヨブ記にわかりやすく示されています。ヨブ記の話を丁寧にしていると、時間がいくらあっても足りないので、要点だけお伝えします。神様の御前に正しい人だったヨブさんは、神様からとても厳しい試練を受けて、家族も財産も全て失ってしまいます。しかし、激しい葛藤を経て、ヨブさんは、なお正しい人として生きることを決断し、その生き様を神様に認められたことで、失った家族と財産を回復してもらいました。しかし、その回復された家族も財産も、失う前と同じではなかったんですね。ヨブさんは、確かに神様によって色々回復してもらった。でも、それは「元通り」ではなかった。

つまり、神様が示される御計画、神様が注がれる祝福、神様が垂れてくださる恵み。それらは、おそらく私たちの「かつての何か」を取り戻すためではなくて、私たちが、まだ見たこともない、誰も知らない「これからの何か」を与えるためではないかと思うのです。

「わたしがこの都に与える大いなる恵みについて世界のすべての国々が聞くと、この都はわたしに喜ばしい名声、賛美の歌、輝きをもたらすものとなる。彼らは、わたしがこの都に与える大い

なる恵みと平和とを見て、恐れおののくであろう」。この御言葉に包み込まれている福音の正体は、「ありし日の栄光が再び輝き出すのだ」ではなくて、「世界のすべての国々が見たことも聞いたこともない、初めての栄光が輝き出すのだ」ということなのだと思います。

私たちの生きる社会も、様々な課題があります。バビロン捕囚ほど強烈で劇的なものではないにしても、数え上げれば、気落ちして、うんざりしたくなるような問題だらけです。物価や給与を昔の水準と比較して、「昔は良かった」とため息をついたり、大勢の子どもで溢れていた当時を思い出しては、現代社会に有様に意気消沈したり。教会の営みについても、かつてのような勢いは失われ、もう昔のようにには戻らないかも知れないと思うと、悲しくもなります。

でも、あえて言うなら、多分、そうなんです。もう昔のようにには戻らないんです、きっと。それが神様の導かれる歴史であり、人生なのでしょう。でも、だからこそ、まだ誰も知らない、見たこともない未来が待っているんだ、ということでもあります。それは、私たちにとって全くの未知であるという点で、不安で心配を引き起こします。ただ、私たちは、何があっても、どんなことがあっても、主の導きを信じて、委ねることの大切さを知っています。目の前の、自分の出来る限りの奉仕と祈りを続けながら、人知を超えた神様の御計画があることを知っています。もう昔のように戻ることはなくても、その過去を塗り替えて、喜びに染めてくださる未来があるんじゃないかならうかと。神様の御業が、聖なる都の回復なんて小さな出来事に留まらず、世界中の人々を愛し、慈しみ、そして、ここに私という信仰者を生み出す奇跡を実現したように、ですね。神様は、この先にも、きっと驚くような未来を備えてくださっているはずです。そして、その未来が到来した暁にはきっと「彼らは、大いなる恵みと平和とを見て、恐れおののくであろう」という御言葉が成就するのだと思います。「恐れおののくであろう」と言うのは、ちょっと過激かもしれませんが、我々として、これを「ビックリされるくらいに」と言い換えてみたいと思います。キリストの教会が、

キリストの教えが、愛が、慈しみが、恵みが。「ビックリされるくらいに」世の中を力付け、揺れ動かし、新しい歴史へと繋いでいくことを信じてみたいと思います。神様の祝福とは「過去の再来ではなく、未来の創造である」と受け止めて、如何ともし難い、儘ならないこの世界を、なお祈りと希望を持って生きていたいと願うものであります。お祈りを致します。

神様。今日も私たちをこの礼拝と祝福の場へと導いてくださり、ありがとうございます。あなたの導かれる歴史や人生は、私たちの想いを超えて、豊かで驚きに満ちています。確かに、私たちの願い通りではありません。私たちが懐かしむ過去の栄光を取り戻してくださるのでもありません。しかし、私たちのまだ知らない、誰も見たことも無い未来を、あなたはすでに御計画に定められ、御心のままに導いてゆかれます。不安や心配によって、目の前の景色しか見えなくなってしまう私たちです。どうか、私たちの信仰を強め、あなたの信頼を新たにさせ、いつも期待と感謝をもって歩んでゆくことができますように、お支えください。また、今日から始まる新しい1週間も、昨日までの1週間とは異なる、真っ新な毎日であると受け止め、喜び楽しんでその一步を踏み出すことができますように。

このお祈りを大切なイエス様の御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。